

第4回 知的障害者の住まい検討部会

日 時	平成 27 年 8 月 31 日 (月)
開催場所	KRCビル 大会議室
出席者	赤川委員、五浦委員、浮貝委員、神田委員、齋藤委員、志賀委員、穴倉委員、八島委員、渡邊委員
開催形態	公開
議 題	1 議題 (1) 中間報告書の取りまとめについて (2) 今後の論点について
議 事	<p style="text-align: center;">— 開会 —</p> <p style="text-align: center;">— 中間報告書 (案) について事務局から説明 —</p> <ul style="list-style-type: none"> ・在宅で生活している方へのアプローチをどうしていくのかというところを色濃くしていくべきだと感じます。住まいにおける在宅の方への内容や視点をもう少し盛り込んだ方が良くはないでしょうか。 ・横浜市の中で多種に分類されてしまった相談システムの役割を含めた検討を進めていく必要があると思います。 ・相談員も知識を持っておく必要があるので、行動障害に対する知識を学ぶことが必要だと思います。そのあたりも研修の取組に盛り込んでいければ良いと思います。 ・オール横浜市はとても良いと思います。ただ、共通言語ということだけではなく、支援というところまで踏み込んでもらいたいと思います。 ・オール横浜市という考えを出すのであれば、横浜市としての標準・スタンダードを示していく必要があるのではないのでしょうか。 ・自閉症の理解の難しさは50年前と今とで、親が言っていることは変わっていません。現実的に進めるためには、いきなり全てにおいて5点満点の基準で支援を求めるのは難しいと思います。何ランクかの基準を設けて、その段階を踏んで進めていくような、ステージを設けると良いのではないのでしょうか。 ・強度行動障害の研修は県でやっていますが、非常に幅広く対象者も多いので、施設のみなさんが受けられるわけではないと思います。ですので、横浜市が行ってほしいですし、その際は、県や国と違った、横浜の評価スケールを考えると良いと思います。中間報告書としては研修を掲げ、各論としてももう少し個別具体的に検討を進めていければと思います。 ・もっと具体的に強度行動障害の方の状態を分解し、段階を踏んで支援を進め、達成度なども盛り込んでいく必要があると思います。そして、それらを研修と併せて進めていく必要があるのではないのでしょうか。 ・行動障害の方の支援区分のチェックリストはありますが、行動障害のある

方が実態としてどのような生活に置かれているか等の細かなチェックリストがあるわけではありません。また、施設で適切なサービスを行っているかどうかを見る指標もないと思います。さらに、職員の方がこういう力を付けていくべきというキャリアアップという視点もないと思います。そういったものをある程度作らないと、オール横浜市は達成できないのではないのでしょうか。

- ・行動障害の方の中には、実際に、サテライト型での支援でないと厳しいということで、そのような環境で支えている事例もあります。一言、サテライトという言葉が入っても良いかもしれません。

- ・GH（以下、「GH」という。）は入所施設と比較すると、地域での集団生活だと思っています。そこでの自閉症の難しさは、集団ではなく個別の生活が必要ということです。そういった事が、後の専門性につながるのではないかと思います。

- ・入所施設を希望する場合、区役所が窓口になりますが、GHの窓口は、はっきりしていません。今後の住まいを考えるにあたって、そういった窓口が必要になるのではないのでしょうか。

- ・委託相談や計画相談として関わっていく中で、経過を見ながらGHを目指そうということはあると思いますが、相談にひっかからない人をどうしたら良いか、課題としてあると思います。

— 議題の(2)について説明 —

- ・全国の施設を見て思うのは、横浜市の療育センターでの自閉症への対応は、レベルが高いと思います。しかし、支援の内容について、放課後等デイサービス等で使われているのかというと、そうではないですし、GHや日中についても同じだと思います。それがもったいないと感じます。

- ・横浜市は療育が進んでいるので、それらの支援を数珠つなぎでつなげていけると良いと思います。予防の視点と生活の立て直しはセットだと思いますが、時間が短いので、中間的なアセスメントの場についても提案できると良いと考えています。

- ・療育センターの話がありましたが、療育センターも勉強的なものだけではなく、キャンプのようなものをするべきではないのでしょうか。どういうことかということ、キャンプはその人の人間性に近づくものだからです。療育などの支援を考えるにあたっては、本人が一体どういう人なのかということを実に理解することが必要だと思います。そういったことも広げていく必要があるかもしれません。

- ・療育での早期発見は高いレベルだと思います。ただ、構造化した状態で通園として対応することはできますが、それを一歩、生活場面に置き換えて考えると、そんなにできないかもしれないという話がありました。専門家でも生活場面における支援が弱くなってきているのではないのでしょうか。

・そのライフステージごとの支援が繋がっていないということが根底にあると思います。それらをつなぐ仕組みを作っていくことが必要ではないでしょうか。

・支援を考える上での鍵は、家だと思います。家を基準に考えていないから、支援が繋がっていないのだと思います。ずっと一貫して関われるのは家であり、GHも療育や家庭の延長だと思って支援を進めています。そこを療育や支援者が踏まえておく必要があるのではないのでしょうか。

・予防や療育を考える時には、親に伝えていくという視点も踏まえていかなければならないと思います。

・今の親がGHを求めているのは、親なき後の心配があるからです。どうしてもそこに目がいってしまい、本人の視点が抜け落ちてしまっている。突き詰めると、親なきあとの住まいの保障がないということだと思います。例えば、60過ぎたら住まいの保障があるということになれば、親の動きはガラッとかわるのではないかと思います。今は先が見えないから、先走っているのだと思います。

・成年後見における親族後見も認められなくなってきたので、社会でどう支えるのかという視点が重要になってくるのではないのでしょうか。サービスが充実する中で家族が抜け落ちているということはあると思います。もちろん家族には家族の役割があると思います。ただ、家族の支援を前提にするのではなく、専門性が必要な場合は専門家で対応するなど、社会で支えていくということが必要だと思います。

・GHは少人数で暮らすことで、その人に合った暮らしを組み立てやすいということがありますが、関わる職員が少ないために、職員の力量によって質の差がでてしまうことが考えられます。オール横浜市で見ると時には、評価による質の担保が必要という話もありましたが、特に小さい法人は内部評価をどうするのかなど、細かな課題が出てくると思います。どうやったら機能していくのかについても少し具体的に検討していけると良いのではないのでしょうか。

・小さなNPO法人も必ず参加できる仕組みを検討する必要があると思います。横浜市はA型のGHがNPOへ移行している法人が多くあります。自分たちでクオリティコントロールが難しくても、第三者の指導的な評価が必ず含まれるような形が望ましいのではないのでしょうか。

・先進的なものを作っていく一方で、底辺の部分を広く浸透させていくという、この2点は必ず押さえていく必要があると思います。今後の議論の中で、これらを踏まえて仕組みを検討し、提案していけると良いのではないのでしょうか。

— 本日の意見を踏まえ、中間報告書(案)を修正し、
各委員確認後、検討部会としての中間報告書することを確認 —

	— 次回の日程を確認し、散会 —
--	------------------